

教皇ウルバヌス 8 世の治世における蜜蜂表象に関する研究
ベルニーニの《バルダッキーノ》とサン・ピエトロ大聖堂の装飾事業を中心として

提出者 佐藤 仁

〔論文の内容の要旨〕

教皇ウルバヌス 8 世と美術家ベルニーニがローマ・バロック美術を創始したと、一般に考えられている。その核心をなす、ウルバヌス 8 世のサン・ピエトロ大聖堂の装飾事業の大半は、ベルニーニによって実現された。それらの中でも、教皇の祭壇を飾る《バルダッキーノ》が最も重要な意味をもつ事業だったことは、議論の余地がない。この《バルダッキーノ》に関しては、ウィットコーアーやレーヴィンを初めとする優れた研究者によって多くの研究が積み重ねられてきた。本論文は、ウルバヌス 8 世のサン・ピエトロ大聖堂の装飾事業を、これまで十分な考察の対象にされることのなかった、バルベリーニ家の紋章である蜜蜂表象に焦点を当て、その表現の変遷や意味を実証的に考察する。さらに教皇が鑄造したコインの銘文等を手がかりに、ウルバヌス 8 世のサン・ピエトロ大聖堂の装飾事業の根底にある宗教的な意味や教皇の意図を、総合的に解明しようとするものである。

本論は以下のように構成されている。

はじめに

第1章 蜜蜂のかたち

- 1 リンチェイ・アカデミーと蜜蜂研究
- 2 蜜蜂の図解 1625 年
- 3 二次元の蜜蜂
- 4 立体化された蜜蜂
- 5 《バルダッキーノ》の頂の蜜蜂

結論

第2章 蜜蜂の純潔

- 1 聖歌隊礼拝堂の再建
- 2 聖母信仰
- 3 ソロモンの柱の復活 1624-28 年
- 4 月桂樹が意味するもの
- 5 内なる異教性
- 6 蜜ロウによる聖化

結論

第3章 蜜蜂と神の摂理

- 1 紆余曲折する計画
- 2 大天使ミカエル
- 3 太陽崇拜
- 4 上部構造の概要 1628-33年
- 5 聖三位一体と戴冠のヴィジョン

結論

おわりに

以下、章ごとに内容を要約する。

第1章 蜜蜂のかたち

本章では、バルベリーニ家の紋章である蜜蜂が、ウルバヌス 8 世の美術事業によって生み出された作品にどのように表現されたかを考察する。最も注目すべきは、リンチェイ・アカデミーによるガリレオの顕微鏡を用いて制作された 1625 年の蜜蜂図で、この科学的な研究成果によって、これ以降の蜜蜂の造形表現は劇的に変化した。その変化は教皇の詩集の挿絵からピエトロ・ダ・コルトーナのバルベリーニ宮の天井壁画や教皇の墓や《バルダッキーノ》、さらにはバルベリーニ宮の装飾にいたる、さまざまな作品に無数につけられた蜜蜂の造形に広く認められる。この論証は、1952 年のメトロポリタン美術館でのシンポジウムにおける、パノフスキーの有名な報告によって知られるようになった 1630 年の蜜蜂図が、1625 年のそれに基づく改訂版であることも指摘することになった（ただし、1625 年の蜜蜂図は、チェザレ・ドノフリオが 1967 年の著書で紹介している）。

本論ではまた、1625 年に蜜蜂図とともにウルバヌス 8 世に献呈された蜜蜂に関する研究書『アピアリウム』の内容や、古代のコインにおける蜜蜂表象について考察する。蜜蜂に関する古代の文献などから、いかにウルバヌス 8 世への賞讃と、教会のヒエラルキーが蜜蜂によって可視化されたか、が論じられている。最後に、それらが《バルダッキーノ》の頂にとまる 4 匹の巨大な蜜蜂がどう関係しうるのが考察されている。

第2章 蜜蜂の純潔

本章では、蜜蜂の特性とも関連づけうる「純潔」の概念に着目して、ウルバヌス 8 世のサン・ピエトロ大聖堂における一連の美術装飾事業における聖母信仰の役割の重要性が論じられている。「純潔」の概念は蜜蜂の特性とも結びつく。長い間、蜜蜂などは交尾をせずに自然発生的に生まれると考えられ、それが聖母の「純潔」に結びつけられたからである。

サン・ピエトロ大聖堂における装飾事業で、ウルバヌス 8 世の聖母信仰が認められるのは、聖歌隊礼拝堂の再建整備にミケランジェロの《ピエタ》を用いた点に、先ず認められる。さらには、ウルバヌス 8 世が枢機卿時代に整備した、サンタ・マリア・デッラ・ヴァッレ聖堂の自家の礼拝堂の整備が、パウルス 5 世によって、聖母信仰をもとに装飾されたサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂パオリーナ礼拝堂を手本としている点にも、聖母信仰

の基本的な方向が見いだせる。

ウルバヌス 8 世が鑄造したピアストラ銀貨に「あなたの庇護のもとに」という聖母信仰を表す銘が記されているが、これは聖母賛歌の一節に基づく。そして蜜蜂はミサに用いるロウソクにも通じ、古代や中世の文献（ウェルギリウスやヤコブス・デ・ヴォラギネら）でも蜜蜂の象徴的な意味が言及されている。こうしたウルバヌス 8 世の聖母信仰は、《バルダッキーノ》を構成する捻れた柱、ソロモンの柱には蜜蜂や月桂樹（古代の柱ではブドウ）、そして太陽のモチーフという教皇の主要な象徴が組み合わせられ、蜜ロウによって鑄造された柱を飾っている。そこには、古代文化とキリスト教の教義が融合し合った、ウルバヌス 8 世の図像の特質が見られる。

第3章 蜜蜂と神の摂理

本章では、ウルバヌス 8 世の大天使ミカエル信仰に注目し、ウルバヌス 8 世のサン・ピエトロ大聖堂の装飾事業の根底にある信仰と意図を分析する。教皇のミカエル信仰は、彼自身のホロスコープに関連するものだとされ、それが古代に太陽崇拝につながるものであることが示される。つまり、ミカエルはローマと教会の守護者であるだけでなく、教皇自身の守護者でもあったのである。教皇がサン・ピエトロ大聖堂の後陣にミカエルの祭壇を設けようとして、参事会の反対で頓挫したのはこうしたコンテキストから理解できる。今日も残る大天使ミカエルの祭壇の誕生もこうした経緯と関連するものと考えられる。また、ジョットのアトリウムの《ナヴィチェッラ》のモザイク画の堂内への移設も、教皇のミカエル信仰のコンテキスト中で理解できる。

そして最も重要なのは、《バルダッキーノ》の上部構造で、第 1 章で述べた、巨大な 4 匹の蜜蜂に加えて、プットが捧げ持つ教皇の三重冠が、ペテロの記念碑（トロフェーオ）から《バルダッキーノ》の頂の十字架、そしてクーポラの父なる神へとつながる垂直方向の一貫性が認められ、それがウルバヌス 8 世の信仰と自負に結びつく。そうした教皇の意図を理解する鍵となるのが蜜蜂が象徴する意味にほかならない。

結論

ウルバヌス 8 世の紋章である蜜蜂の表現とその意味に注目することで、教皇のサン・ピエトロ大聖堂の装飾事業が、いかに当時の文化的・宗教的活動と深く結びついたものであったかを解明してきた。いろいろな意味での終着点が、《バルダッキーノ》だと考えることができる。教皇の装飾事業に認められる一貫した発想と意味は、蜜蜂をキーワードして理解することができる。

本論文には、付録として、失われた「ピエタの祭壇」の再現に関する考察、およびウルバヌス 8 世の詩集のリスト、参考文献等の資料が付されている。

〔論文審査の結果の要旨〕

ウルバヌス 8 世のサン・ピエトロ大聖堂における装飾事業、特に《バルダッキーノ》はローマ・バロック美術に関する最も重要な研究対象の一つとして、多くの優れた研究が積み重ねられてきた。そのむずかしい分野で、教皇の紋章である蜜蜂の表象という、重要にもかかわらず、これまで本格的な研究がされてこなかった点に着目し、総合的な研究を目指した本論文の基本的発想は高く評価できる。

とりわけ、1625 年のリンチェイ・アカデミーがガリレオの顕微鏡の観察をもとに製作した蜜蜂図によって、蜜蜂の表現が劇的に変化したことを実証的に示した点、つまりベルニーニ作品を中心とする、ウルバヌス 8 世に関係したさまざまな作品に表現された蜜蜂の表現を集め、それを詳細に分析した点は、非常に独創的であり、その成果は注目に値する。この点が、本論文の最も高く評価できる点だといえる。

これに加えて、リンチェイ・アカデミーからウルバヌス 8 世に捧げられた蜜蜂の研究、『アピアリウム』の言説を中心に、メダルやコイン、インプレザ等に見られる蜜蜂が象徴する意味に関する論考もたいへん優れている。

本論文のより大きな部分を占めるもう一つの論点は、ウルバヌス 8 世のサン・ピエトロ大聖堂における一連の装飾事業には、教皇の一貫した意図が反映している、とする仮説である。そのキーワードとなるのは、聖母信仰と大天使ミカエル信仰で、それぞれ第 2 章と第 3 章で詳細に論じられている。この二つのうち、聖母信仰は「純潔」という概念で蜜蜂と結びつき、ミカエル信仰はウルバヌス 8 世自身のホロスコープによって太陽崇拝、そして蜜蜂が預かるとされる「神の摂理」とも結びつく。つまり、これらの信仰や概念の融合は、同時に、ルネサンス的な古代文化とキリスト教文化の融合につながるのである。

本論文では、こうしたウルバヌス 8 世の信仰や古代文化に対する人文主義的伝統に基づく関心が、《バルダッキーノ》を頂点とする、サン・ピエトロ大聖堂の装飾事業にどのように現れているか、が考察されている。その際、中断、あるいは変更されてしまった装飾企画や、ほとんど注目されることのない作品をも含めて、ウルバヌス 8 世の在位期間全体にわたって、総合的に考察しようとしている点は、これまでそうした観点からの十分な考察がなされてこなかったことを考えると、評価できる点だといえる。たとえば、美術史家には問題にされてこなかったコインに着目し、その銘の意味などが考慮されているのには独創性が認められる。

ウルバヌス 8 世のサン・ピエトロ大聖堂の装飾企画における、聖母信仰とミカエル信仰の意味と、一連の装飾企画の計画の中止や変更、そして最終的な形に関する本論文の論旨は、個々の事案に関する理解や解釈に難がないわけではない。したがって、その仮説を全面的に肯定できるかどうかは疑問が残る。しかし、個々の論点には優れた観察や解釈が多々あり、また総合的に理解しようとする基本的な姿勢は高く評価できる。全体のアイデアも一つの仮説として価値を持ち、今後の研究に資するところ大だと考えられる。